

佳作

なつかしい温もり

渡邊 健太

拝啓 柳田先生

私は四十路を越えた大人ですが、どうにも好きになれない母がいます。会えば反目し、会話をすれば必ず口論になり互いに尊重、尊敬の出来ない間柄です。

母の生き方には理屈が無く、感情で生き、他人の都合より自分の幸福が何より優先されます。

それに対し、私は理屈っぽく、頑固で、他者に迷惑を掛けぬ事を第一に生きています。そんな二人が相容れるわけも無く、過去には不毛な衝突が何度もありました。新たなそれを恐れ、私はもう

何年も母を避けて生きています。

妻はその関係を憂い、子供たちを会わせるという口実で時折母と会わせ、なんとか親子関係は続けています。

普段は考える事も忌み嫌う存在なのに、ある時妻から

「パパ、やっぱりお義母さんに似ている。」と言われました。

それは子供たちに絵本を読み聞かせをしている時で、情感豊かに読んでいるその様が、どこか母の雰囲気似ていたのだそう。そもそも顔が似ていることはどうにもならないことなので諦めていましたが、そこまでも似ていると聞き、目の奥あたりから恥ずかしさがカーッと湧いてきて、即座に否定をしました。

しかしその最中、幼かった頃の光景がパツと鮮明に頭に浮かびました。

それは母がしてくれた絵本の読み聞かせの光景。家の決まりでテレビをあまり見られなかった私には読み聞かせはとても楽しみな時間でした。母は沢山の絵本を読んでくれました。

『ふしぎなかぎばあさん』では主人公の広一と同じく鍵っ子だった私は、話に入り込み、広一が鍵を無くした冒頭のシーンではハラハラし、かぎばあさんの登場時には怪しい人だと警戒もしました。終盤、かぎばあさんが作るポークソテーが本当に美味しそうで、私はその味を想像し口の中に創り出していました。おかしな話ですが、その味を超えるポークソテーに未だに出会えていません。『どろぼうがっつ』、『100万回生きたねこ』、

『モチモチの木』。

夢中になったそれらの絵本の側には、楽しそうに読んでくれた母の姿が在りました。気恥ずかしくなるくらい大げさな表現を交えながら読む母は、絵本を目一杯楽しませてくれる読み聞かせの名人でした。

妻に指摘されたその時、私が子供たちに読んでいたのは『三匹のやぎのからがらどん』。

小さいやぎ、中ぐらいのやぎ、大きいやぎで声質を変え、怪物トロールの台詞では1回で喉が枯れる位しゃがれた声を出し、それぞれのやぎ登場時には子供たちのお楽しみ会で覚えた歌を挿入し、シーンに合わせて本を揺らしながら読んでいました。

子供たちが歓声をあげながら聞いてくれるのが

嬉しくて、愛おしくて、自然と力が入ってしま
います。

かずにしていた気持ちの整理が出来ました。あり
がとうございました。

自分も読み聞かせをするようになって、あの頃
の母の気持ちが分かりました。私と母が似ている。
妻の言う通りだと思えました。

敬具

胸に生まれたなつかしい温もりが、なんだか心
地悪いです。

その温もりは母を好きだった頃の思い出をいく
つも思い出させます。

私は母のことが未だに好きになれません。

しかし、絵本の読み聞かせをしている時は、母
から受けた愛情を思い出し、なつかしい温もりを
素直に受け止めようと思いました。

先生に手紙を書く。この機会のおかげで、手付